

海田雲野

kaitamono

illust スクリブ draw

雷神

に執着

されて

困

っ  
て  
い  
ま  
す

／ 完全書下ろし ／

いい加減にしてって  
言ってるでしょう!?

雷神  
VS  
水神

この物語はフィクションです。

実在の人物・団体・事件・宗教・歴史などには関係ありません。

序章 水神は困っています

海辺の崖<sup>がけ</sup>の上、絶壁にそびえ立つ白い石造りの神殿の入り口で一人の下級女神が空を見上げていた。

——そろそろね……。

曇り始めた空に不穏な気配を感じる。

崖<sup>がけ</sup>の下では荒れた大波が岩にぶつかり、嵐の訪れを示すかの如く<sup>ごと</sup>激しく白い飛沫<sup>しぶき</sup>を上げていた。

薄暗い空に冷たい風が吹き始めた頃、イレーネは足元に置かれていた水瓶<sup>みずがめ</sup>へ手を伸ばした。

——今日こそは絶対に追い返してやるんだから。

恵みの雨のような透き通る青い瞳に強い意志を宿し、遠くより流れてくるドス黒い雲

を見つめる。

爆発音と共に近づいてくる雲は時折、黄色く光り、ジグザグとした稲妻が走っていた。

——いつ見ても禍々しい。

遠くからでもわかるほど強い神力を感じさせる雷雲を前に、イレエネはゴクリとノドを鳴らした。

——……ま、負けないんだからっ。

徐々に垂れていく眉を無理矢理吊り上げ、気持ちを落ち着けるためフーツと長い鼻息を漏らす。

それから、イレエネは水神らしく銀の水瓶を肩に乗せて構えた。

身に纏った純白の布の裾が地面につくのも気にせず、革でできた靴でしっかりと地面を踏み締める。

すると、ほぼ同時に強い風が頬を撫で、井戸の底にたまった水のような紺色の髪をふわふわと揺らした。

空からひととき大きな黒い塊が押し寄せてきて、小さく赤い唇を結ぶ。

——来た。

ゴロゴロと音が鳴り、雲の中に大きな人影が現れた。

そしてイレーネは思い切り水瓶みずがめに神力を込めた。

空からだったはずの水瓶みずがめから勢いよく大量の水が飛び出し、真っ直ぐ天へと向かう。水は雲の中の人影にぶつかった。

——手応えあり。

水の先に確かに物質を感じる。

直撃したであろう人物の姿を想像して、イレーネの表情はパツと明るくなった。

——いける。今日こそ彼に勝てる！

何十回と一方的に敗北してきたが、勝機を感じたイレーネは調子づいた。

青白く細い腕に血管が浮かぶほど力を込め、水瓶みずがめから伸びる水柱の勢いを増す。

大量の水圧で雷雲を押しやると、雲はわずかに後ずさったように見えた。しかし……。

「随分ずいぶんな挨拶あいさつだな、イレーネ」

黒い空に低い声が響き渡り、イレーネはハツと息を呑のんだ。

同時にバチツという音が響き渡り、辺りが一瞬明るくなる。

強烈な黄色の光に目を細めると、水の柱が飛沫しぶきとなって空中に飛び散った。

「あっ……」

イレーネの口から失意の声が漏れる。

青い目を開き、空を見上げる。

するとそこには、濁った灰雲のような長髪をフワフワと靡かせる、雷のような黄色い瞳を持つ男がいた。

宙に浮く彼の周囲には、両方の先がとがった短い槍型の黄金の神器、雷霆が浮かんでおり、黒い雲が漂っていて、ひと目で彼がこの空を操っているのだとわかる。

「エ、エギル……」

筋肉質な腕を晒す彼を目にした途端、イレーネの自信は急激に萎んだ。

「再会が待ちきれなかったらしいな」

ククツと口の端を意地悪く上げた彼は、手首に輝く金の腕輪を触りながら、こちらを見下ろしてきた。

彼の右手にバチバチと小さく雷の筋が見え、彼が片手でイレーネの水を弾き飛ばしたことを知る。

——嘘でしょう……あんなに簡単に……。

自分の全力を虫を払うかのように蹴散らされた。

イレーネは太い眉を下げた。

先ほどの攻撃は真正銘、全力だった。

——…勝てる気がしない。

ガツクリと項垂れ、口を力なく下げる。

これまで幾度となく彼には負け続けてきたが、勝利を諦めたことは無い。しかし、この時ばかりは流石のイレーネも弱気になった。

——どうしよう……。

自然と肩に乗せていた水瓶を下ろしてしまう。  
すると、宙を進み彼がこちらに向かってきた。

「こ、来ないでっ」

短く叫ぶが、彼はお構いなしにイレーネの目の前までやって来た。

ふわふわと浮いた足を、ゆっくりと地面につける。

体格のいい彼が前に立つと、女であるイレーネの小ささが際立った。

——近くに来ると、迫力が……。

彼の身体から感じ取れる神力の強さに気圧<sup>けお</sup>される。

彼は黒い服を着ていて下には二股に別れた深緑の布を履<sup>は</sup>いていた。筋肉質な両腕<sup>うで</sup>が晒<sup>さら</sup>されており、男らしい血管が浮き出ている。

雲に隠された雷神という日の光に当たらない特性のせいで肌は白く、彼にはシミの一つもなかった。

——うう……相変<sup>あへ</sup>わらず女泣かせの容姿……。

吊<sup>つ</sup>り上がった眉と目、尖<sup>とが</sup>った鼻やアゴは戦<sup>いくさ</sup>神のような荒々しさを感じさせ、女の目を惹く色気を兼ね備える美麗さを持ち合わせていた。

彼はジロジロとイレエネを上から下に見ると、ポツリと呟<sup>つぶや</sup>いた。

「少し瘦<sup>うす</sup>せたか」

「だ、誰のせいだ……」

顔を上げて睨<sup>にら</sup>みつける。

彼はわずかに眉を動かした。

「俺のせいかな。それは良いことを聞いた」

気分よく開いた口は大きく、獣のような尖<sup>とが</sup>った犬歯<sup>けんば</sup>が覗<sup>のぞ</sup>き見える。

「どうして喜ぶのよ！」

イレエネは声を荒げた。

彼に勝つために力を上げる特訓をして痩せたのは確かだが、怒るイレエネを前にしても全く悪びれず、意味のわからない反応をする彼の態度には毎度のことウンザリしてしまふ。

「帰って！ 帰ってよ!!」

水瓶みづがめの取っ手を握りしめ憤慨ふんがいする。

彼は腰に手を当てハッと意地悪く笑った。

「そう赤い顔で帰れと言われれば、逆に帰りたくなるものだぞ」

「このっ！」

涼しい顔で煽あおってきた彼の内面は最悪だ。

神々をまとめる最高神ゼウスの息子にしてその寵愛ちようあいを受ける男神エギル。彼は非常に傲慢ごうまんで強引な神だった。

最高神と同じく天空を操る特別な力を持ち雷獣の異名を持つ彼は強力な雷神で、その神力はオリンポスの十二神に匹敵するとも言われている。

一方、イレーネは水神ではあるが下級女神。

「もう一度、水をかけてみるか？」

「くっ、くっ……」

勝てるはずのない敵を前にイレーネは唇を噛み締めた。

彼の軽い口調からわかる通り、水をかけたってどうせ帰ってほくれないのだろう。

——またエギルに好き勝手されるの？

イレーネの頭に、これまでの出来事が浮かぶ。

力のある神であるはずのエギルだが、彼はなぜか下級女神のイレーネに執着していた。

エギルは何がいいのか、毎月のようにイレーネの神殿を訪れては意地悪く虐めてくる。

彼は嫌がる姿に喜び、言葉で虐め倒した後に、今度は寝台に押し倒して身体を暴いてくるのだ。

底なしの体力で自由気ままに意識を飛ばすまで蹂躪されるのは、女神としての尊厳を奪われているようで納得がいかない。

——今月もなんて、そんなの、嫌っ！

イレーネは眉に力を込めた。

——そっちがそう言うのなら、やってやるわ！

水瓶みずがめを持ち上げ、注ぎ口をエギルに向ける。

反撃に気づきながらも、気だるげに目を伏せた彼に向かって大量の水を放とうとするが、その前に眩まはゆい光が辺りを照らした。

「きゃっ!!」

その瞬間、足元に落雷が落ちた。

ドカンという音がして、イレエネの手から水瓶みずがめが離れる。

光と爆音でイレエネは耳を塞ぎ、その場にしゃがみ込んだ。

視界の端で水瓶みずがめが転がる。

「相変わらず、か弱い声だな」

「なっ」

いつ後ろに回ったのか、エギルは片膝をつきしゃがんだイレエネを背後から抱きしめて捕らえた。

急に触れられイレエネは驚いた。

「いつのまにっ」

「ククッ、お前は何度やっても同じように驚く……ああ、いや、今の落雷は偶然だがな」  
子供を相手するみたいに彼が楽しそうに呟く。

イレエネは耳に当てていた手を離して彼の腕を力一杯掴んだ。

反抗の意思をこめて爪を立てるが、エギルは抱きしめる力を強めただけだった。  
「ワ、ワザとやったわね！」

「だったらどうする」

隠す気もないくせに、平然と嘘をつく神の姿は人間にはとても見せられない。

「さいつていっ！ 離してっ！」

暴れようとするが、しゃがんだ体勢では上から包み込んでいるエギルの方が有利だ。

「力づくで振り払ってみろ。強き者には従う。それが神々のやり方だろう？」

「そ、それは……」

耳元で囁くエギルの言葉を聞いてイレエネは声を詰まらせた。

神々の世界には、とある決め事がある。

『強き者に従う』これは神界の暗黙のルールだった。

——力ある者が好き勝手できるなんて、そんな決まりがあるからエギルが調子に乗る

のよっ！

イレエネは腹が立って仕方がなかった。

エギルは簡単に振り払えというが、そんなことが出来ればイレエネは困っていないのだ。

——うう……力さえあれば……。

水神としてのプライドをズタズタにされ、イレエネはついに脱力してしまった。

「さて、茶番は済んだな。そろそろ抱かせろ」

「なっ！」

浮遊感がして、一瞬で体勢が変わる。

気がついた時にはエギルの肩の上に雑に抱えられていた。

紺色こんいろの長い髪の毛がフワフワと宙に浮く。

少し横を向くと彼の首筋が見えた。上に視線を向けると荒々しいエギルの顔が近くにあって、不覚にもドキツとする。

「じよ、女性を軽々しく持ち上げないでっ！」

恥はずかしさからほんのりと顔を赤くする。

エギルの場合、抱えるというよりは浮かせて手を添えているだけなのだが、イレエネは反射的に言った。

「抱かれることには抵抗がないようだ」

「なっ！　ち、違うわよっ！　抱くのはダメっ！　断固反対っ!!」

動揺してくだらない抗議をしてしまったイレエネの揚げ足をとってくる。

エギルは軽やかな足取りで神殿の中に入っていった。

白い石でできた神殿の中は涼しく、立派な円柱が連なっている。

水神の住居らしく地面には薄い水が張っており、いくつもの白い花が浮かんでいた。

中は薄暗く、水に反射する光と、銀の皿に乗った小さな炎だけが辺りを照らしていた。



「無断で入らないでっ!」

「この無防備な神殿に入るなどは、難しいことを言うな」

「無防備じゃないわ!」

スタスタと進んでいくエギルにイレ―ネは顔をしかめた。

一応、要所<sup>ようしよ</sup>に力を張り巡<sup>めぐ</sup>らせているのだが、彼には弱すぎて感じ取れないらしい。

――うう……もっと力を鍛<sup>きた</sup>えないと。

進んでいくと、ひときわ広い場所に辿<sup>たど</sup>り着く。

そこは祭壇<sup>さいだん</sup>の置かれた神域<sup>かみ</sup>だった。

四方に水の流れる滝<sup>たき</sup>があつて、広間の中心には花の模様<sup>もよう</sup>が彫<sup>う</sup>られた円形の石の祭壇がある。

祭壇の上には人間から供えられた果物などが並んでいるのだが、エギルは立ち止まることなく奥へと進んで行った。

祭壇の奥には水神の王ポセイドンを模<sup>も</sup>した等身大の石像が台座の上に鎮座<sup>ちんざ</sup>しており、後ろにカーテンのように薄い水が流れている。

エギルは石像の横を通り過ぎると、薄い水に手を伸ばした。

バチっという音と共に水が弾け、イレエネの頬に飛沫がつく。

——はあ、また侵入された……。

最後の砦である水のカーテンを易々と乗り越えて、エギルはついにイレエネの寝室へとたどり着いた。

中には真っ白なシーツの敷かれた大きな円形の寝台があるだけで、人間のような生活用品はほとんどない。

己の不甲斐なさに落ち込んでいると、背中にシーツの感触がした。知らぬ間に下ろされていたらしく驚く。

瞬きしていると顔に影が落ち、エギルが覆い被さってきた。

「ひと月ぶりだ。楽しませてもらおう」

ニヤリと口の端を上げたエギルに腕を突き出し、いっーと口を横に開く。

「い、やっ！」

「そう言うな」

ククツと笑ったエギルはイレエネが逃げられないように体重をかけてきた。

「だから、いっ——んっ！ んんっ……!!」

遠慮なくアゴを掴まれ口付けられる。

—— なっ！

熱を持った薄い男の唇を感じて声を上げる。

「んっ、んっんん——!!」

イレ―ネは彼の胸を押しながら目を細めた。丸い大きな目で睨む。  
しかし、エギルは楽しそうに形の良い片眉を上げただけだった。

「んっ、あう、っっ……!!」

味わうように角度を変えてイレ―ネの唇を貪<sup>むさ</sup>ってくる。

「ふっ、んんっ、ふうっ」

鼻に抜ける声が聞こえてきて、イレ―ネは顔を赤くした。

—— やだっ。

恥ずかしさから突き出した手でエギルを叩くが、彼はあろうことか舌で唇を舐めてきた。  
た。

「んんっ!!」

ヌルツと滑<sup>すべ</sup>る感触がしてイレ―ネは叩く手を拳に変えた。

彼の胸を思い切り殴る。

「そう急かすな」

わずかに離れた唇の隙間から空気が漏れる。

「違っ……んんっ——!!」

すると、否定しようと開いた口に彼の舌が割り込んできた。

「あっ！ やっ、んんっ!!」

言葉を発そうとするとところを、エギルの熱い舌が絡めとる。

「ふあっ、あっ、んあ」

舌の根本を押さえられ口の端から唾液だえきが漏れる。

アゴを伝う液の不快感に、イレ―ネはついに我慢の限界を迎えた。

——好き勝手して、このっ！

自分の舌を引っ込め、思い切り歯を閉じようとする。

「おっと。噛むのはなしだぞ、イレ―ネ」

瞬時にエギルが離れ、ガチンという歯のぶつかる音がする。

「うっ」

アゴに振動が伝い、イレ―ネは顔をしかめた。

「ククツ。あまり俺を楽しませるな」

「た、楽しませてなんか……!」

行動を読まれていたのが腹立たしい。

――前は上手くいったのに……!

そう何度も同じようにやられてくれないのがエギルという男だ。

それに、なんだかんだ以前、噛みついた時も驚きこそすれ途中で止めてくれたわけではなかった。

だが、それでも簡単に身体を暴かれるのは癢しやくというものだ。

「イレ―ネ。もう少し芸を磨いてこい」

「ふぎけないで!」

上から目線で言い、エギルは上半身を起こした。

腰を縛る布を取り払い、彼は自らの黒い衣服を脱ぎ捨てた。

岩を精密に削ったかのような逞たくましい上半身が露あらわになる。

「ちよっと!」

エギルが特技の早脱ぎを披露し、イレ－ネは焦った。

「嫌よ！ 今日嫌！」

「まあ、そう言うな」

「嫌だつてば!!」

足をバタつかせて暴れるが、乗り上げているエギルの身体を退けることはできない。

そうしていると彼が寝台に両腕をつき、クッキリと線の入った胸筋きようしんと腹筋が正面にきた。

——こんなの退けられるわけじゃないじゃないっ。

鍛え上げられた身体は、華奢きゃしゃなイレ－ネが暴れたつてびくともしない。

仕方なく、イレ－ネは力づくで追い返すことを諦めた。

「お、お願いだから他の女神のところへ行つて！」

今度は言葉で説得せいてくを試みる。

すると、エギルは雷色の目で不思議そうに見下ろしてきた。

「び、美の女神が貴方に気があるって、この前、私、聞いたの。泉で沐浴もくよくしていると……」

イレ－ネは彼の氣を引くために魅力的な話をちらつかせた。

水神であるイレ－ネは時折、女神たちの沐浴中の雑談を耳にすることがあった。ちょうど先日、美の女神の話を盗み聞いたところだった。

彼はその美貌から女神たちに求愛されることが多い。

——いくら人気だからって、流石に美の女神の名を聞けば靡くわよね。

彼女は神の中でトップクラスに美しいのだ。エギルだって氣になるに決まっている。そう思い、イレ－ネは青い目で見上げた。

すると目が合い、彼の口の端が嬉しそうに上を向いた。

——きたっ！

イレ－ネは釣られて口の端を上げた。うんうん頷き、彼の氣を良くしようとする。するとエギルが、クククと声を堪えて笑う。

「イレ－ネ。拒むのは逆効果だと、いつになったら学ぶんだ？」

「え……」

「むしろ俺を焚き付けるのが上手いのか」

理解する間も無く、大きな手が胸元に伸びてくる。

「きゃっ！」

突然、二つの膨らみを掴まれた。

イレ－ネの身体がビクツと跳ねる。

「な、何するのっ！」

「何とはナニ以外にないだろう」

下品な言い方をして笑うエギルを見て、イレ－ネは説得に失敗したと悟った。

「あっ！」

エギルの手が白い布の上から、形を変えるほどに揉みしだいてくる。

「やっ、あっ」

激しい動きに、思わずあえぎ声が漏れる。

「いい声だ」

「んっ、んんっ」

唇を強く閉じて声を殺すが、鼻から抜ける声が抑えられない。

「ふっ、ふう、んんっ、ふうん」

グニグニと手のひらで弄もてあそばれていると、生理的な快樂が身体に走る。

イレ―ネは赤くなる頬を隠すように顔を背けた。

エギルの手の動きに合わせて息が荒くなり、声を漏らさないよう懸命に呼吸をする。そうしていると、エギルが不意に耳元へと口を寄せた。

「イレ―ネ、布越しでもお前のかたさがわかるぞ」

「つつ！　そ、そんなことつ、あつ、ああ……!!」

パツと背けていた顔を戻し言い訳しようとするが、その前に親指でグリグリと胸の突起を押された。

「あつ、ああ――！」

強い刺激で腰が跳ねる。

いつの間にか乳首が立っており、イレ―ネは羞恥しゆうちに震えた。とっさに彼の両手首を掴む。

「どうした。そんなに感じるのか」

勝手なことを言い胸を弄いじり続ける彼の腕を退けようとするが上手く力が入らない。

「やつ、あつ、ああつ」

薄い布は防御力が全くなく、膨らんだ蕾つぼみをエギルの指先が弾いた。

良いようにされて、また腰が跳ねる。

イレ－ネは反応してしまう自分の身体を恨んだ。

——っつ、早くっ、引き離さないと……。

そう思い力を入れるも虚しく、エギルは胸を弄び続けた。

そして調子に乗った彼は、華奢な肩にかかっていた服のヒモを二の腕の方へとずらした。

すると、簡単に白い肌が露わになった。

「あっ——！」

布一枚に覆われていた胸が空気に晒されて、イレ－ネは大きく口を開いた。

「ククッ、こうして見るとお前がいかに感じていたのかわかるな」

「あっ、か、感じてなんていないわっ……！ か、勝手なことを言わないで！」

白い豊かな膨らみの上にツンと立った桃色の乳頭がイレ－ネの言葉の矛盾を示す。しかし、イレ－ネは決して認めなかった。

「いつにも増して強情だ。だが、それがまたいい」

「なっ……！」

困惑するイレ－ネを他所に、エギルは纏まとうもののなくなった胸に触れてきた。

少しの力で胸がふにと形を変え、骨張った指が肉に沈しずんでいく。

「良い景色だ」

「あっん、やめてっ、んっ……!」

先ほどより直接的な刺激が襲ってきて、イレ－ネは首を振って拒んだ。金色の耳飾りが揺れる。

「イレ－ネ。お前も本当は嫌じゃないんだろう」

「っっ! そ、そんなこと……」

イレ－ネは言葉を濁にごした。

確かに触れられれば快楽は感じる。

けれどそれは生物的なもので、それが必ずしも抱かれないということに直結するとは言えないはずだ。

イレ－ネが考えていると、エギルが腰を押し付けてきた。

布越しにかたさを感じハツとする。

——これっ……。

見なくても膨らんでいるとわかる彼の男根に、イレ－ネは一晩中、抱きつくされたこれまでの夜を思い出した。

胸を揉みしだくエギルに懇願する。

「んっ、な、何でもするから……！」

「なら抱かせろ」

「つつ、それじゃ意味ないっ……あっ、じゃないっ！」

不毛な言い争いをし、イレ－ネは唇を尖らせた。

結局、何をどうしてもエギルはイレ－ネを抱くつもりなのだ。

——つつ、はあ……もう、追い返すのは無理そうっ……。

イレ－ネは喘ぎ声の漏れる隙間をぬって、長く息を吐いた。

諦めが襲ってきて、今までの態度が嘘かのように拒む気がなくなる。

こうなると、後はエギルの好きにされてしまうのだが、イレ－ネにはもうこの事態を打破する策がなかった。

これまでに何度このやりとりをしただろうか。

あまりにも繰り返され、イレ－ネは数えることをやめてしまったが、両手の指で数え

切れないのは確かだ。

何年か前に一夜の過ち<sup>あやま</sup>で身体を重ねてしまって以降、エギルはなぜか下級女神のイレネに執着してくる。

人気のある彼ならば相手探しに困ることはないはずなのに、不思議と誰にも気に留められないようなイレネの所に来るのだ。

——私にはエギルの考えていることが、さっぱりわからない……。

現実逃避をしていると、胸を支配するエギルの声が聞こえてきた。

「どうした、もう抵抗は終わりか」

「っっ」

——エギルめっ。

幼稚に煽<sup>あお</sup>られてエギルを見ようとする。

その時だ。肌に電流が走った。

「きゃっ——!!」

声が裏返り、身体に力がこもる。

胸の辺りから首筋にかけてビリビリと痺れが伝播<sup>でんぱ</sup>し、イレネは青い目を見開いた。

「ククク、お前はいつでも新鮮な反応をする」

エギルの方を見ると、手からバチバチと小さな雷の筋を飛ばしていた。  
何をされたのかイレーネは瞬時に悟った。

雷神であるエギルは自らの手から、イレーネの身体に微弱な雷を流したのだ。

片目を細めて不快感を露わにする。

「つつ……いたいじゃない」

わずかに痺れる唇を震わせ、弱々しい声を出す。

雷は首を伝い頬の辺りまでを痺れさせた。

これをされてしまうと、イレーネは完全にお手上げだった。

「すぐに良くなる。いつもそうだろう？」

「つつ」

イレーネは息を詰まらせた。

彼の流す雷は弱く、肌の表面を滑るすべように刺激を与えてくる。

それは初め、痛いように感じるのだが、そのうちムズ痒いがゆようなものに変わっていく。  
そしてそれは徐々に快楽に変わり、イレーネの意識をおかしな方へと持っていく。

まうのだ。

——マズい……。

イレエネは慌てた。

これまで、この雷のせいで散々な目にあつてきた。

「エ、エギル……そ、それだけはイヤなの……」

青い目を揺らし、掠<sup>かす</sup>れるほど小さな声でお願いすると、エギルは黄色い目をわずかに見開き眉尻を下げた。

まるで可哀想なものを見るような同情の眼差しに、イレエネは多少ホツとした。

エギルが深くため息を吐く。

「イレエネ。そんな目で俺を見るな……そんな目で見られると……ますます虐めてやりたくなる」

「なっ」

言い終わる前に口の端を盛大に上げ、エギルが悪い顔をする。

あつと思つたのも一瞬。

エギルの手が首筋に這<sup>は</sup>つた。

耳の付け根あたりの弱い部分にビリッという刺激を感じる。

「やあっ！」

肩が跳ね、首を隠そうと頭を傾け肩につける。

すると、反対側が無防備になり、エギルの手が容赦なく触れてくる。

「ああっつ——!!」

耳の近くでバチッと音がして、イレエネの口から悲鳴が放たれる。

皮膚の薄い部分に雷を流されて我慢できなかった。

イレエネは顔を思い切り歪めた。

「いつ、やあっ……！」

アゴが上がり、口が限界まで開く。

ビリビリと刺激が波のように皮膚を伝っていき、青い目に薄っすらと涙が浮かぶ。

「んあっ、はあっ、あっ、ああっ！」

息が切れ、イレエネは寝台に敷かれた白い布を握りしめた。

——あっ、あたまが、びりびりして……。

雷のせいで頭が痺れ始める。

まるで酒の神が振る舞う美酒を飲んだ時のようなフワフワとした感覚は、あつという間に刺激を心地の良い快感へと変えていった。

「あつ、ああつ……あつん」

反応を楽しむためか、ワザとらしくゆっくりと上下に動くエギルの指先からは、微弱的な雷が流れ続けており、少しずつイレエネの体温が上昇していく。

薄く色づき始めた肌を滑り、彼の手は胸の方へと移動した。

人差し指が蕾つぼみに触れ、容赦なく雷ようしやを流してくる。

「やああつ——！ あつ、んつ、ああ……！」

イレエネは身体を捻ひねって身悶みもだえた。

エギルの指が離れ、雷の余韻よゐんが肌に残る。

「ククツ、さっきまでの威勢が嘘のようだ」

「やあつ……あつ」

胸を上下させて息を吸い込み、勝手を続けるエギルを見る。

彼の雷のように黄色い瞳は光り、中に稲妻が浮かび上がっていた。

妖あやしく色づく彼の目から色気を感じ、イレエネはすぐに目を逸そらした。

——ああ……くらくらしできちやった……。

脳が痺れているせいで、彼の首の筋や、厚い胸板。腕に浮かぶ血管や、頬に垂れた瘵のある灰色の髪まで、何もかもが扇情的せんじょうてきに見える。

最上級の男を前に、イレ－ネの身体は女としてしっかり反応してしまっていた。

「そろそろお前も物足りなくなってきただろう」

身を振よったイレ－ネの身体の線をなぞり、エギルの手が腰に這はう。

「んあつ……」

くびれを両側から挟み、今日、一番の雷が走る。

「ああっつ——!!」

強すぎる刺激でイレ－ネは叫んだ。

腰が別の生き物みたいに跳ねて、下半身に雷が伝わる。

「んあつ、あつ」

カッと身体が熱くなる。

すると、足の付け根からトロリと蜜みつが漏れた。

——ああ……。

快樂に溺れ始めた自らの身体に、イレ－ネは頭の中で落胆した。

これでは完全にエギルの思惑通りだ。

「いやあ……」

否定の言葉は弱く、とても彼を止めることはできない。

エギルが乗りあげていた身体を浮かせ、イレ－ネの股へと手を伸ばす。

ワンピース状の服の裾がたくし上げられ、太ももに風が当たる。

「本当に嫌か？」

「んっ、いやあ……」

一枚の布でできた衣服の下には他に布などなく、無防備になった秘部に、エギルが太い指を這わせた。

ヌルツと滑る感触がして、イレ－ネは焦って口を開いた。

「つつ……これはっ、ちが……」

片眉を意地悪に上げ、黄色い目が嘲笑うように見下ろしてくる。

イレ－ネは悔しくて唇を噛み締めた。

「あっ……」

休む間もなく、エギルが割れ目を上下に擦り始め、イレエネは短く息を吐いた。

彼はヌルヌルと滑る指に蜜を絡めると、猛々しい大男とは思えないほど繊細な手つきで愛撫を始めた。

「んっ」

ひだの間を指が動くたび、イレエネの身体は快楽を期待した。

先ほどの雷で快楽へのタガが外れてしまったのだ。

ドキドキと心臓が音を立てて、これから起こるであろう行為を待ち望む。

——んっ、やだっ……わたしっ、たら……なんて簡単な女……。

拒みたいはずなのに、身体は素直に快楽を求める。

意地悪なエギルはそんなイレエネの期待に気づいているのか、中々、感じる部分に触れてこない。

「あっ、エ、エギル……」

「どうしたイレエネ。何か言いたいこともあるのか？」

トゲのない優しい声でたずねられ、イレエネはゴクリとノドを鳴らした。

サッと目を逸らす。

「あ、い、いいえ……べつに……」

いつもの強引な態度と違うことから、一瞬、流されそうになったが、イレ－ネはなんとか踏みとどまった。

——じ、自分から求めたりしたら……お、お終いな気がする……。

あくまで無理矢理、襲われているのだと思わなければ、これから先、彼に齒向かえなくなってしまうそうだ。

そうなれば、これからはずっとエギルの思うがままにされてしまう。

——だめ。絶対だめ。

イレ－ネはいつか必ず、この関係を終わらせると自らにかたく誓っている。

——きよ、今日はたまたま負けてしまったけれど……いつの日にかきつと……。

そんな日が来るのかは甚だ疑問だが、イレ－ネは諦め悪く信じていた。

黙っていると、痺れを切らしたのかエギルが指で女の敏感な芽に触れてきた。

「あっっ！」

下から押し上げるように触れられて、イレ－ネは片目を細めた。

「んんっ……！」

待ちわびていた快樂が与えられ、目尻が垂れてしまう。

「隠すのが下手だなイレ―ネ」

「やっ」

知らぬふりをしてくれればいいものを、わざわざ声に出すところがエギルなのだ。  
イレ―ネは唇をムツと突き出した。

「拗<sup>す</sup>ねるな。楽しみはこれからだ」

ククツという笑い声を聞きながら、イレ―ネは迫り来る快樂に備えた。

「んあっ、んんっ！」

小さな芽は、分厚い指の皮膚に擦<sup>す</sup>れてビリビリと痺れた。

雷なんて流されていないはずなのに、身体に刺激が走っていく。

「あっ、ああっ……」

足がビクツとし、股から次々に愛液が溢<sup>あふ</sup>れてくる。

「濡れやすいのは水を司る水神だからか？　なあ、イレ―ネ。お前はと思う？」

「やっ、んっ……し、しらないっ」

卑猥<sup>ひわい</sup>なことを言われて顔を真っ赤にする。

耐えられなくて、イレ－ネは手で顔を隠した。

——感じるのはわたしのせいじゃないっ……。

身体がエギルの指づかいを覚えていたのだ。

そのせいで快楽の記憶が呼び起こされ、簡単な動きでも期待して濡れてしまう。

こんな身体にされてしまい、イレ－ネはエギルを恨めしく思った。

不快感を示すためジロリと睨<sup>にら</sup>むと、彼はあろうことが触れている指先に微弱な力をこめた。

敏感な芽にビリッと刺激が走り、青い目を限界まで見開く。

「ああっ——！」

自然と足の先に力が入り、硬直したみたいに足がピンと伸びる。

直接、芽に伝わった刺激は、首や胸にされるものとは全く感じる強さが違った。

「あつ、ああ……！」

刺激はイレ－ネの身体に伝わり、脳を麻痺<sup>まひ</sup>させた。

思考がボーッとしてきて、鼻から声が抜ける。

「い、やあ……」

秘部の入り口から、湧き出るように愛液がこぼれ落ちた。

尻を伝う水の感覚に、イレエネの目は潤んだ。

——んっ、こんな風に感じちゃうなんて……。

自分がいかに単純な女なのか突きつけられるのは、曲がりなりにもある水神としてのプライドを傷つけられる。

雷神と水神、それぞれ雷と水を司る二人はある意味、相性が良すぎた。

水は雷をよく通す。そのせいで、イレエネはエギルの扱う技にめっぽう弱かったのだ。

「随分とよさそうだな」

「つつあ——！」

優しいのはい彼は、容赦なくビリビリとした愛撫を続けた。

悲鳴のような声が室内に反響する。

あまりの刺激に股が痺れて、手の感覚すら無くなってくる。

——こ、こんなの……たえられないっ。

イレエネはもう泣きそうだった。鼻をすすり、溢れそうになる涙を気力でなんとか堪えていた。

だが、彼はそんなことなどお構いなしだった。

敏感な芽を弄<sup>いじ</sup>つていた手を、今度は入り口に当てがった。

「やあつ……！　だめえ、んっあ……エ、エギル……！　や、やめてよう……！」

そんなことを言っただけで、もう止まることはないとかわかってはいるのに、口癖のように言葉が溢<sup>こぼ</sup>れる。

蜜<sup>みつ</sup>で濡れた入り口は、エギルが力を込めるとすんなりと指を飲み込んでいった。

「あつっ……」

柔らかい肉を開き、中に男の太い指が入ってくる。

イレ―ネは腰を反らせた。

「ククツ、嫌がっている割には、すんなり入ったな」

その質量から、彼がいきなり指を二本入れてきたことを知る。

「んんっ」

エギルは笑うと中で指を折り曲げた。

薄い腹の裏辺りが押され、イレ―ネは奥歯を噛み締めた。

「ああつ!!」

芽を擦られていた時とは違う、迫り上がるような快樂が襲ってくる。  
指の腹でグリグリと押され、イレ－ネは息を荒くした。

「はっ、あっ、ああっ……！」

彼の長い指は狭い中を自在に動き回り、奥にまで触れてきた。

中に入れられた二本の指に合わせて、彼の親指がまた芽に触れてくる。

二点を同時に攻められ限界を迎えようとした時、エギルが指の先から中に雷を放った。

「やああっ——!!」

頭が真っ白になるほどの刺激が襲い、彼の姿が二重に見えた。

目の前がチカチカして、気がつくと寝台に力無く四肢を投げ出していた。

イレ－ネはエギルの雷で盛大に達してしまったのだった。

「あっ、はっあ……っつ、はあっ、あ……」

息を吸うのも苦しく、イレ－ネは身体を震わせた。

胸を激しく上下させ、細い指先をピクピクと動かす。

「少しやりすぎたか」

絶叫に驚いたのか、少しだけエギルが反省の色を見せた。

イレ－ネはもう睨むこともできなかった。

強い刺激に、快楽を超えて壊されてしまうような恐ろしきすら感じた。

エギルは達した中から指を抜くと、イレ－ネが動けないのをいいことに、寝台から降り悠々と腰に纏う深緑の衣服を脱ぎ捨てた。

長い足が現れ、反り上がった陰茎が姿を見せる。

遅い彼のモノは、血管が浮き出るほどに大きく膨らんでいた。

イレ－ネはぼやける視界で彼の行動を見ていた。

身体は快楽に支配されていて、自分でもヒクヒクとひだが動いているのがわかる。

エギルが再び覆い被さってくるのを見て、わずかに頬を緩めてしまう。

情けないと思いつつも、待ち望んでしまっている自分がいた。

「さて、お待ちかねだ」

白いイレ－ネの肌に影が落ち、エギルがギラギラと光る黄色い目を向けてくる。

程よく肉のついた太ももを持ち上げられ、大きく股を開く体勢へと変えられる。

制止することもできず、エギルの欲が入り口へと当てがわれた。

「あっ——……」

一言もなく熱い杭が中へと侵入してくる。

達したことで大量の蜜が溢れ出る入り口は、エギルを易々と迎え入れた。

直ぐに最奥へと達し、膣内がギチギチに埋め尽くされる。

腰がピツタリとくつつくと、その圧迫感に圧倒された。

「はあっ、あっ」

「いい締め付けだ」

その場に留まることなくエギルが腰を引く。

直ぐに腰が打ちつけられ、肉のぶつかる音が神殿内に響いた。

「あっ！ あっ、んっあ！」

かたいモノが容赦なく中を擦り、身体が浮くほどに揺さぶってくる。

パンパンと腰を打ちつける高い音が続き、膣が伸縮を繰り返した。

「はあっ、あっ……あっ、あっ」

待ちわびた快楽はイレーネの思考を奪い、自分が何をすべきなのかを忘れさせる。

——ああ……きもちいい。

エギルの手がイレーネの腰を掴む。

引き寄せるように腰を打ちつけられると、更に奥へと届き強い快樂を感じた。

「これでは足りないかっ」

わずかに息を乱したエギルが沿<sup>そ</sup>わせた手から雷を流してくる。

微弱なそれは、リズム良く訪れる中の快樂と相まって、天にも昇るほどの幸福を与えてきた。

「ああ……え、ぎる……」

秘部は彼に吸い付き、腰を動かすたびに極上の快樂が襲ってくる。

「この吸い付く中がたまらないな」

エギルが齒を見せて動物的に笑う。

情事において、男の欲情した顔は何よりの興奮材料だ。

中が彼を締め付け、エギルの動きが激しくなる。

「あっあ、あっ、あっ」

いいように揺さぶられているだけで、脳が蕩<sup>とろ</sup>けるほどに欲が満たされる。

雷と水。相性の良い互いの性質がそうさせるのか、二人の身体は最上の快樂を生み出した。

「イレ―ネ。いい乱れっぷりだ」

「やああ……っっ」

エギルが眩き、唇を重ねてくる。

口付けは直ぐに深いものへと変わり、舌が卑猥に絡み合った。

「あっ、ふうっん、んあっ、はあ」

息苦しさ、身体に走る刺激、中を攻める熱い欲。

どれもがイレ―ネを追い立て、徐々に堪えられないほどの強烈な快楽の波が訪れる。

「えぎ、る……うっ、んっ、あっ……」

うわごとのように、ろれつの回らない声が響く。

足が震え、手が自然と彼に伸びた。

エギルはその手を掴み、寝台へと押し付けた。

「いいぞイレ―ネ。最高の快楽だ」

そう言ったエギルの動きが激しくなる。

一定だったリズムが早まっていき、快楽の強さが上がっていく。

イレ―ネは髪を振り乱して喘いだ。

「あつ、あつ、ああ！」

そしてエギルが奥へと強く押し付けた瞬間——頭が弾ける感覚がした。腰がガクガクとして身体中に力がこもる。

「あつ、ああ……ああああ——!!」

絶頂の悲鳴が響き渡り、イレエネの大きな目から大粒の涙がこぼれ落ちる。

雫が頬を流れ寝台の布に吸い込まれる。

その間、イレエネは放心していた。

動きを止めたエギルが焦点の定まらないイレエネを見下ろす。

「あ……つ、はつ……あつ、はつ、つつ……」

イレエネの顔は強すぎる快樂によつてしかめられ、額や首には玉のような汗が浮かび上がっていた。

目尻からは湧き水のように雫が溢れ続けている。

そうしていると、男の掠れた笑い声が聞こえてきた。

氣力を振り絞ってエギルを見る。

彼は黄色い目を楽しそうに細めていた。

「ククッ……この世に、水神の涙ほど美しい水はないな」

翻弄ほんろうされるイレエネとは違い、まだ余裕の見えるエギルに半ば絶望のような気持ちになる。

その予感当たって、彼は放心するイレエネにニヤリと笑いかけると腰を引いた。腰が打ちつけられ、再び抽送ちゆうそうが始まる。

「んっ、あっ！ あっんっ!!」

達したばかりの中で、先ほどよりも質量が増えた彼の欲が暴れる。

たくましさすぎる彼の欲望に、イレエネはこの後自分に起こる地獄のような快楽を覚悟した。

イレエネの気も知らず、エギルが楽しそうに流れる涙を吸い取る。

「イレエネ、今日こそ途中で飛ぶなよ」

吐息混じりの声が聞こえ、イレエネはまた美しい涙を流した。

打ちつけられる欲で思考がドロドロに蕩とろけていき、彼の言葉へ返事をすることもできなかった。

霞かすむ視界の中で、彼が妖しく笑うのが見える。

イレ－ネはまぶたを閉じ、湧<sup>わ</sup>き出る水を押し出した。  
こうして、今日もまたイレ－ネはエギルに負けてしまったのである。